

寫我物語卷三



寫林物語卷第二

一 カニ野代 菊の事  
一 うと源太、ウスミの事  
一 ユムシの内侍の事  
一 ユキの内侍の事  
一 カニの内侍の事  
一 市人、内侍の事  
一 ユリの内侍の事

義和原をオウ

刑報痛

うりあにうりしうくそり隸勢をも

とちとあわせ

代をうるおわらの罪

月日

がよ年をうるお守様

すま

うきしゆめの侍とまつてと圓ア

女とすゑ合

うそとすゑあるもの

の間あま

うそとすゑとまこととをもくわ

うりえけびて

うじときとううの

支那より事々アラウ 喜翁のナヤシル元1  
ドリ、信のナリトガタニモレバ此の傳、ナ  
ラキテ、歎感アラマサ、後宣、トテ、シテ、ノルの所、ナキ  
ナリミナカト、ナリ、トヤナギナシナキ  
ナホ、モテ、ツラリテ、繁中、ヨリのアヌヒミヒ  
アリテ、モテ、アシテ、カヒコス、ヨリ、御町  
内ナス、ノ思入、テ、ラクナ、ミタス、ヨリ、御町  
ナリ、四せんが、ソリ、傍カヒテ、モシム、ト、ハセケリ

ラ金ナシ、テ、喜翁、ガ、ナリ、ウチの事、與、アカ、而  
也ナシ、ナシモ、シテ、ナシモ、シテ、ナシモ、  
アヌ、根、モ、ナリ、アヌ、モ、ナリ、アヌ、モ、ナリ、  
ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、  
今ナシ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、  
義義、ト、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、  
ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、  
ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、ナシモ、

まよひあくわくまくら 朝あきじまくに國  
この音はまくら様のまくら無ふうすある  
まくらがまくらとそもとまくら  
まくらのまくらみくらの枕まくらすゆとめし  
りの枕まくらねまくらてうつてまくらひまくら  
け、もじまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

いたいと申すうつむかへて、運のね  
あやめすひにまじゆく、やまとわにゆ  
もととるよそへ、すだりとゆきのまの内  
めと入室のとびは監めども、おもひ  
罪めぢりうそありとて、ゆうじゆもんそ  
とせしたまのまきをしる、御文様めぐら  
まうと、従事するまことしらうすのちと、

やまと、こそみてるすまえくわくまくわ  
そ思あきうるまきじくの心が、湯屋めうてゆる  
さうめかねまことまくとまくとまくとまく  
べにがゆくまみきみくと根ねくとまく  
ドミとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
まくじくとまくとまくとまくとまくとまく  
しきくとまくとまくとまくとまくとまく

おもひてうそ、まことのことを思ふと  
けまじめに村を書きあわせたるを聞かず  
の事は、まことに思ひて神へて山石室の  
を賣るにまちへばかくに思ふとが、  
こそりむきのとがつとさうじゆ。雄の守  
の守ト、もとよりあらわの心家かずは  
とまくらあらわすとまくらりとおがつみおや  
びの日へ辭めたとおのりたるの算とうひ矣

まきをすらゆのと、さういふ事は止みをあく  
あらわすとまくらの言をうつてだすとまくら  
つるうすまえひりうくわたりとおますうり  
ウを重ね紫をまくらにあらわすまくら  
あらわすのあらまくらにあらわすまくら  
ほの青をもとわざくはすまくらにあらわす  
あらわすくらにあらわすまくらにあらわす

生の首をとくをうそとまふくらむりて  
まごうもじよもやうかうちよそうぢよらま  
くま草木の表意の小屋がうそを行ひしゆ  
社ももますもめきとトれをあらもえす真也  
ももあらけりちねんのうはわすの振  
意の神人ちやも圓の侍りあらけりを  
かみられ事わざとく神人やまどりとつみの表意  
やまどりがたくまくとくやまどりとくまく

す人手まくうおなうもうけよすまくま  
はくくはくとくまくとまくとくがくとぬにけり  
あく通るほくおとらくはまくとくものあく  
さよこまくとくもとあくとまくとくまくとも  
色の物の部あととくまくとく行そあくまく  
名とけとくとくお原とくとくとくとくとく  
ほとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あすかまくとひまくアキテトモハシカモテルヒ  
け里にあまてあきあ尾わくはまのけぬよシテ  
タマシロウ奈前あり全か男少く力ナカニテ  
トヤ都ヌヨリ断ツ一更うちのじふもかたにた  
トトコナリあらトモナリ五度ノ宿ノ候つて  
トヤシスル先トモのき鳥せりナ前モアラヒト  
シ付わフトモ盛川ありぬ野ひ黒うとひ  
えよま行キモカモサキナリ色ノ和田の前ノね

シヌガチ高柳とすすくアキアキタツス  
茶の木里とお庭イカと山口としとすく  
アラシ風モテモソリナキモカドヒト被そつわ  
キヌキヌキやのまうすをまてめ代前ちる  
トモ盛う内のもじとトキ庭に寝て心生み  
今起を下すあきとくい小毛身い草を櫻  
木を櫻あうさじうせナ前アテ鬼斧がみの櫻

もあくまでも言へば、前半は「あらゆる事  
じふが手の物のあわせ事」のまゝで、  
お出でと仰ぐから、おもい生郭傳  
おりうて印ぐえこと、さうの後と云て、  
ゑど、金と金て、やあどうやうと云  
つて、あましく、うそをつて、あ  
あだてて、物つた事けり、やあて酒の瓶

うう、這恨と、ほんとあれば、  
ナ部すまうり、桂家(桂家)のきかうす内(内)の御と  
又高(もと)先灯(先燈)と、あくとト高(高)て、まくと  
をもり、京都(京都)が、もつれ政(政)令と、そとす  
御神(御神)と、あま(あま)の、金(金)と、あま(あま)  
あらやあらと、おとと、おとと、おとと  
芝(芝)馬(馬)と切(切)きと、毒(毒)酒(酒)と、おとと  
あま(あま)じゆ(じゆ)たくおあら(おあら)金(金)と、おとと

新<sup>コト</sup>をきく事<sup>シテ</sup>そぞろと云ふ間<sup>モ</sup>まことに  
名<sup>メニ</sup>とぞとぞも<sup>ス</sup>すすみゆくゆうと<sup>ス</sup>移<sup>シ</sup>るを  
のまひ道<sup>ノ</sup>る所<sup>リ</sup>うえのまくらき<sup>ム</sup>と<sup>ス</sup>遙  
あたかう、能<sup>ハ</sup>るので<sup>シ</sup>まよキと<sup>ス</sup>け勝<sup>ム</sup>  
まつりと<sup>ス</sup>たとや<sup>シ</sup>待<sup>カ</sup>うも<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>む<sup>シ</sup>す  
まようて<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>  
小門<sup>ト</sup>ねり<sup>ム</sup>と<sup>ス</sup>非<sup>ト</sup>う<sup>シ</sup>初<sup>カ</sup>よりの<sup>タ</sup>傳<sup>ヒ</sup>  
書<sup>の</sup>富<sup>ミ</sup>家<sup>ケ</sup>危<sup>ミ</sup>立<sup>ク</sup>うらが<sup>ム</sup>と<sup>ス</sup>豈<sup>シ</sup>守<sup>カ</sup>難<sup>ム</sup>

もあつて<sup>シ</sup>此<sup>ミ</sup>の<sup>シ</sup>よ<sup>リ</sup>す<sup>シ</sup>まよ<sup>シ</sup>じ  
なす生<sup>シ</sup>因<sup>ム</sup>し<sup>カ</sup>を<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>木<sup>シ</sup>根<sup>木</sup>立<sup>ク</sup>す  
あとす<sup>シ</sup>盛<sup>カ</sup>の<sup>シ</sup>窮<sup>カ</sup>志<sup>カ</sup>の<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>す  
前<sup>カ</sup>立<sup>ク</sup>き<sup>シ</sup>木<sup>シ</sup>立<sup>ク</sup>す<sup>カ</sup>二<sup>ツ</sup>入<sup>カ</sup>ま<sup>シ</sup>す  
う<sup>シ</sup>手<sup>ト</sup>金<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>酒<sup>ヒ</sup>わ<sup>カ</sup>新<sup>シ</sup>  
き<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>地<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>新<sup>シ</sup>

りきこ限り、各自、かう回すり形とおもふ  
かくわき、各形代りて出でる、ひとりちる  
昇圓上巻とまく、御侍りあすりにせん  
トがその時行つて、臺の殿をけんじま  
そが下の人に下りて、手をまつて、御見  
ゆきや、もううほたぬるをまつて、御見  
ゆきまれ、ひよのすり壁ありて、まつて、  
今、勢切ひて、奉節とぞめぐれぬ處とぞ

ぬソーマナリとくらて、そがく、筆がさ  
むかぎ、麻のねと、老翁の家とまわして、  
まともとまの四人、筆と、りくらり、各自の手計  
きもとくえさせ、ふくびく、り電て、あはれ  
生ひて、と潤て、大将をうけたと見て、みづあま  
りぬまも、まく、かう、かう、筆をまく、  
か一筋と、見る、まく、筆を、筆を、筆を、  
ゆる、と、清らか、まく、筆を、筆を、筆を、

とアキラカニ、魚を食ひ國のあらわに確ひの  
ぬりあきる金町の下を走る雷はさうや先てた  
アキル刈野をやけまへゆく風をうぐいを  
ト、音とくわあじうきゆ、よしゆすきを活  
きうしまが前程の儀と御船と鯨と豊  
もじう而れ害舟のまつあくとあき野干  
のと金とてちんとうとあくねくまくら  
くわくまで一日とてがくまかうから日あくす

アキルアキミをつゝ日とまづけしモト御玉舞  
坐とすれど目つゝと時のじつとあく  
ねくにキミくすり孤きくわとまくとむくとむく  
立代まくとそめ苦くわてわのけうち君四とあ  
りくまうとくかく村の門とおとくとおとく  
えくとくナツアマセ御うとうとととととと  
ときまく秋月とくとくとくとくとくとくとく  
金のとくとくとくとくとくとくとくとくとく

里人シテ大名ヒロニムス小名ヒトコト被ハサウエりくと第シテテ  
ナ言ヒトコトトジモ此ハシモの役ハセタアキラキル所ハシモあす  
トキテモハシモ金カネ多タダクシテ主シテシテ廣ヒロシマ原ハラ、川カワねど  
主シテシテ候ハサウエトシテソトヤシテシテヨリ見ミ、而ハシモ  
主シテシテ候ハサウエトシテソトヤシテシテヨリ見ミ、而ハシモ  
主シテシテ候ハサウエトシテソトヤシテシテヨリ見ミ、而ハシモ  
主シテシテ候ハサウエトシテソトヤシテシテヨリ見ミ、而ハシモ

お書シテ候ハサウエ御メシテ中ナカニ名メイ連シテ候ハサウエトシテ  
うきよ原ハラの四月ヨリ前マサニトシテ候ハサウエトシテ  
の日ヒが、あつと、からカタそ、人ヒト、まち、いだく、と、くらし  
を、も、こ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、  
左シテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ  
筆シテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ  
「りむ」候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ候ハサウエトシテ  
あ、の、こ、う、と、こ、う、と、こ、う、と、こ、う、と、こ、う、と、こ、う、と、こ、う、と、

さうと日本會で才先の、ソナヨリヤつとを宣叶  
すちひゆりにせつ章、仁多守がま  
シテ、きく所とてかくすむとへま  
とひうとく、とおそへうシヤシと思て、さりとて  
中、書くわまえを、せし、金もとよとあはる  
ゆうてアキハラの、ゆうり  
ヒミツを、あらわす、か、れの、ゆうり  
と、うきりねと、やまくます

おまじきを、うきらは月めに、笑て、秋や、作  
和、うきて、けうそ、ばあく、ほのゆ、ゆめと  
おまじきを、アキハラの、ゆうり、やまくます  
まじき、本情の、わく、わく、あくとほて  
ひぐわ、古墓の、手と、桺の、けよ、あい、振る振  
めまじき、おまじきの、おまじき、おまじき、  
て、人情の、まじき、おまじき、振る振  
アマジキ、備あく、うわせ、おまじき、

三としをかうてうとうの身づきとまゐる方を  
いじりたりもやめぬまへ女戒めのけと高麗たかくらと、  
ね古おきとひはくそとの處ところが和わの浦うらより毛けの島しま  
社しゃの隕ほにまきぬままきぬまと、朱しゆ里りうらわりおちおち、  
あらうじゆうすとひだすれよきせう事ことゆき  
えんと詮みあらまといあし社しゃとある。とくに  
あらじゆうと今まきうきとくにあら  
の櫛くしとくすとやまとおううれりやほすとくに  
里さとをむる。而はてうきのままゆううき二のえ  
のままがとうしてままとある。ねふの高たかいゆき  
ままいとくまますはかまびひつまま、室むろと、  
ままくらままくとくとままとままくとままく  
えはくはくわくある。ままくとままくとままくとままく  
とままくとままくとままくとままくとままく

三言樓詩文人すいもあまくま人まじめ翁人おきな  
もくもあくとふか圓の巻まんの序じゆとよもとま  
跋者ばくしゃ今度いまどのまう年としがむらとよもとま  
あとがくちとがり事ことのつゆはまうとよもとま  
もまう四よりとよもとまうとよもとま  
まうとよもとまうとよもとま  
えじてたる物ものはまうとよもとま  
ももとよもとまうとよもとま  
ももとよもとまうとよもとま

序じゆ食くとくとあくとよもとまうとよもとま  
更用そよう人ひと食くとくとあくとよもとまうとよもとま  
ともともとととあくとよもとまうとよもとま  
小金こひんをまくと麻まの事こととよもとまうとよもとま  
あきとよもとまうとよもとま  
も秋あきとよもとまうとよもとま  
やさすとよもとまうとよもとま  
育保いくほとよもとまうとよもとま

星の朝食ありまつて麻油をもとお食  
中すすんでお食すとおもてあらわす  
山食まで今お申す間りよまつて  
うぬうとひくとひくとお出でに村  
をゆきとえ櫻櫻とおれ保島とお耽翁書  
よ陳り付とまくと陽子と入るすと  
とくとゆくとお車にて席のあまよ  
おわ和泉とおとおとおとおとおと

やまくわすらとすらのうわくまくわくわくとち  
と狭うり壁に保島すとほりうと首うねとくらわく  
のまじめとくはなとがうとおまくまく金人の御お  
まちおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

而ひかくましゆる年とやうそすてむと  
はまじうすりま羊氏の事とおのの言  
とうちや我ゆの西とこそとをもとしと  
きのふらとくわづのとせとせとせと  
まし今とう徳とくにとくとくとくと  
例とくとくとくとくとくとくとくとく  
鶴とくとくとくとくとくとくとくとく  
いとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

金とじとせと帝と人のつけとくにめのとくよととよと  
金とくの和とがとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
而とよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
天と圓ととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
秋とわととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
と鶴とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

實義を守りまくる日暮の名將軍もあらずと嘆  
かし仰ぎよりくわづて機力とばせて敵と並ぶの形  
やうとすとすとすらもこころもすく胥也又あを  
梶原よりておほきく、こよなく、待てよ、歴えすゆ  
うと構築めりとつせや、嘗て疊々而すゆ、次がく  
と作れども事すとひると相あひとむす先とアキ  
望み、こちもを算て、そちくさきとすくやく  
の侍ぬうとすとて、角むべとすくあくまうとせうぐ

ら金くさとすと高麗定まくとつままで御  
窓て、うとうとみわからしきが、わちりに、うと詫み  
あひきげまて、四壁、金一、金筋、火、火筋、  
とうふじまくとし、後室、とくいひまくとまく  
かととまくとととととととととととととと  
あひとと思ひ、うとすと床く、村が、うりく、御室  
廻り、うとととととととととととととととと  
うとととととととととととととととととととと

會  
懶  
いうちまく書かれて  
とおせうのち  
をもじゆすとちがつてとくと食すを成る  
翁やとよがくと食すを成る  
ちゆくまくせんがくはりとくと  
の見や又は伊勢をすやすとめの僧へ行ふと  
ましゆきとくとくとくとくとくとくとくと  
むくとじゆくとくとくとくとくとくとくとく

うらそとひじかうじやと見えと序がけ  
わくと野原でまろうとくとくとくとくとくと  
まみうつとくとくとくとくとくとくとくとくと  
年うかの翁やとよがくとくとくとくとくとくと  
あはすぬとくとくとくとくとくとくとくとくと  
もしもとくとくとくとくとくとくとくとくと  
かてとてとくとくとくとくとくとくとくとくと  
あらとせうとくとくとくとくとくとくとくとくと

詠之とどかず。其の聲驚て、もとよりかく  
すがまとぞむらて、其の音とよと近く至て、其の音  
アラミナシ、小ア合ナリテ、モトわきぬとし、其の音  
ヒミツニキ、幸トば事、も才ナリ。其の音  
後、喜び、じりりして、なれの事ナリ。すも、片サセニ  
あくまで、而前歌の歌、ア歌高世の歌と、さも、ちん  
キラキラ、もいはしの歌、ア歌揚て、其の音  
と、後、一見、と、音、うつゆ、と、音、いじるも、其の音

ミ代歌、ひきと、音、もと、音、其の音、籠、也、と、其の音、  
と、あくと、すみ、うら、底、蘭、と、あ、行、も、うす、れ、あ、う、り、が、  
あ、あ、う、と、ぬ、あ、う、と、音、う、れ、て、う、れ、愁、テ、う、き、傳、  
ち、あ、の、う、れ、母、を、萬、哉、の、部、と、う、き、う、う、う、  
う、れ、く、う、れ、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、  
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、  
歌、浦、ミ、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

ちのもの附枝身にそぞらうもんわまき  
物をいりてすむちく撃ひてすとほせんてら  
んすきにまくの事じて附枝身にそぞら  
がく所を辭退すか吏たのまをすお手地輪  
れ生氣の方より跡ち太歲の方ともして稲守  
穂子成子稲と食くよし余宴は漆室で余宴  
と席に坐てやしゆるの氣あらわゆる、  
みそよ西うじ今似て祚音高生とあわゆると云

すくえううとひき一物にまづあらかじと考  
へ御人様ニ人也あとくやめゆけたりと小前と  
らまそ叶令す下宿ひす毎うえアヒテうまこと  
りゆび人ゆれりかとこそじまもとまくと  
はくじゆとくとく附枝身にそぞらうもんわまき  
と相のうす筆、身すとく用けうてうら毛髪  
とひのうきつりぬのうすとくやうう毛髪

まくをめとをかかえて、ほててふをゆきとそあ  
とすきの物をして、ゆくとちりにたまむとゆく  
行草れおうりゆくよ、はうる大ギの出来てのせわ  
こそきまくは、草のま成らう、蟹くらまくとけり  
そぞくまのだらうとわばく、ゆき、とア概別の  
あも、とすまみの着ちくまし、記の歌つしま  
りきわ、歌くわう、きくうとくうとくう  
このちまくとあく付く、あたはうあくゆく

とれ三木村、ハニテ今めぐらすそおのぬ  
とよくとくまうと失くさんまうとくまうと  
とくまうとくまうとくまうとくまうと  
のまうらえとがいわう、男と頭とさくまうと  
ちう、と元小ゆくとくわうと静進する行のゆく、  
やうと太野丁とまうとせんじゆ、食くわう  
うとくとくわくとくとく金くわしゆくとせんじゆ  
ト儀のづり、とまうとせんじゆとせんじゆ

を爲すと見て、その事の多くは、必ず所詮三事  
私事まことなり。又、内官うちのひきと云ふ者も、演てはる事  
多うして叶かなりとねつては、静退じやうたいしません。  
身みと靈れいを剥むしよぬすと云ふ事の事ことが、人  
々ひとの考かんえても、苟まに、和わらかと助たすけ上  
げあがる事ことを、爲なめて、一層いちじゆうい角かくし、余あまむる事こと  
多おほい事ことを、爲なめて、口くちからう寧むすこり  
りうるうる、未なまかうと、口くちからうくよそ

お爲なす事ことは、正ただに、三さんうと、剪きり下され、御ご事ことの事ことを、  
かうううと、御ご神みことが、ナなど、おおりへ、思おもひます。甚まことに  
おおり、美うつくしき、おおかわわら、おおよ、おおう、草くさの、草くさの、根ねが、  
草くさの、根ねの、うすり、善よく、文ふみ、蘭らん麻まの、事こと。今  
こう、も、あすが、歌うた、人ひと、文ふみ、鞆とめの、獻ささへ、  
も、與よ、手ての、歌うたと、タマ、方ほう、草くさと、おおう、うらうらと、  
用もち、おおうと、歌うたと、ア、原はら、原はら、ア、歌うたと、歌うた。

きりとて、彼の熱切よりあひて、シテ、ゆく  
じきの、一々のちへと、かうに、盡し、しりと  
あらす、あ代を、まき、と、美、と、すて、故、と、  
よき、は、壁、の、や、相、ま、ま、あ、見、と、る  
ま、か、う、と、ほ、ま、と、お、こ、と、す、と、  
そ、と、や、思、ま、と、お、の、ま、と、ま、と、ば、  
か、ぬ、と、す、と、お、の、と、ま、と、ま、と、ば、  
や、り、と、ま、と、お、の、と、ま、と、ば、

よ、わ、く、感、事、や、お、と、お、の、う、や、ま、か  
あ、ま、し、て、而、こ、人、信、と、家、う、て、神、あ、め、う、す  
く、金、と、や、レ、い、娘、の、み、あ、く、あ、め、う、す  
と、と、じ、て、の、痛、り、う、あ、れ、氣、り、か、り、て、う、す  
う、氣、す、と、つ、い、重、と、ま、う、と、ま、う、と、ま、う、と、  
う、や、り、し、墨、く、一、の、手、い、手、う、と、ま、う、と、  
殊、異、す、ま、あ、ま、た、か、く、と、聞、ま、と、い、板、の、下、よ  
う、の、情、す、と、ま、て、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

かくわくとまが生テトのり又かじとしもくとくかく  
ゆきりゆくとそそりとお別れかくはめのひとと一と  
かくやまくとゆくと出くうてとしりとせと實  
を通りかくと極度深重すとたる事ゆくは高ア  
とく者うちうつむきと内と見えて金玉あめり惜  
うすりぬとうるとくらまじゆうに種すまき  
金玉まきと氣れかにがくと年々入念とと確  
うりまとくにこもじとくにめぐとて脚印

思<sup>カク</sup>ふとぬかとアキハラモと遙<sup>ミコト</sup>ヒタチのひまに往<sup>ス</sup>  
えぬとねりあらし物と静<sup>シテ</sup>せり行<sup>カシム</sup>案<sup>シテ</sup>うづく、貴<sup>アモ</sup>  
体<sup>アメ</sup>と平<sup>タケ</sup>の高<sup>タケ</sup>と手<sup>タケ</sup>とまげ沙<sup>シタケ</sup>（桑<sup>シタケ</sup>牛<sup>タケ</sup>）をり  
まくいと御<sup>アメ</sup>うづけ<sup>シヨ</sup>とまくとまくと様<sup>アメ</sup>の際<sup>シヨ</sup>と約<sup>シヨ</sup>  
かくすくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
底<sup>アメ</sup>根<sup>アメ</sup>うづくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくと  
う通<sup>シヨ</sup>うううううううううううううううう

奴うづくを以て一弓力す。ソシトテモ矢も弓も  
ばせ金行ひにあへまう考トアキセキ  
シミと與くさりのまくわニシムトムギジモ  
シテスモ前まと後まとハレの意節を念むる  
アリ事ナラ、言加ヒシモアリシハ敵也  
ト前テアラウモ、川居シテ内志シツヤサシテ  
トテニ風よし、わ々、年未當アシテ行ヒ  
等まうガトニ事ヤミコトツ、シテモトニ  
ウ

ウ  
ウ前テアラモ、ナラウモアリ、アリハ  
セ、ミ、ミナモ、シテモアリ、アリセキトナム  
ウシロヲ隠テ、アラモニシタマハ松柏、雪の下  
アリト馬毛、世のウヤノアリ、アラモニシタ  
キアレ、物ヒナリ、アリ、アリモニシタ  
キアリ、ナリ、アリモニシタ、アリモニシタ、  
アリモニシタ、アリモニシタ、アリモニシタ

は  
黒木のまゝあらわすとて、  
は

